

線形代数 I 演習

- 第 16 回 固有多項式, 固有値, 固有ベクトル (1) -

担当: 佐藤 弘康

問題 16.1. 次の多項式を成分にもつ行列の行列式を求め, 因数分解せよ.

$$(1) \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 \\ 1 & 1+x & 1 & 1 \\ 1 & 1 & 1 & (1+x)^2 \\ 1 & 1 & (1-x)^2 & 1 \end{pmatrix} \quad (2) \begin{pmatrix} 2 & 3 & 4 & 1+x \\ 2+x & 3 & 4 & 1 \\ 2 & 3+x & 4 & 1 \\ 2 & 3 & 4+x & 1 \end{pmatrix}$$

例題. 行列

$$A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & -2 \\ -1 & 4 & -2 \\ -1 & 1 & 1 \end{pmatrix}$$

の固有多項式 $f_A(x)$ を求めよ. また, 固有値も求めよ.解. 行列 A の固有多項式とは

$$f_A(x) = \det(xE_n - A)$$

であるから, サラスの方法を用いて上を計算すると

$$\begin{aligned} f_A(x) &= \begin{vmatrix} x-1 & -2 & 2 \\ 1 & x-4 & 2 \\ 1 & -1 & x-1 \end{vmatrix} \\ &= (x-1)^2(x-4) - 4 - 2 - 2(x-4) + 2(x-1) + 2(x-1) \\ &= (x-1)^2(x-4) + 2(x-1) \\ &= (x-1)(x-2)(x-3) \end{aligned}$$

となる. 固有値とは $f_A(x) = 0$ の解のことだから, 固有値は $1, 2, 3$ である.□ 問題 8.4 の復習 (行列の対角化). 上の行列 A の各固有値 λ に対し, 方程式

$$(\lambda E_3 - A)x = 0 \tag{16.1}$$

を考えよう. (16.1) の解を v_λ とおくと, これらは $Av_\lambda = \lambda v_\lambda$ を満たす. $P = \begin{pmatrix} v_1 & v_2 & v_3 \end{pmatrix}$ とおくと

$$AP = P \begin{pmatrix} 1 & & \\ & 2 & \\ & & 3 \end{pmatrix}$$

が成り立ち, $P^{-1}AP$ は対角行列になる.

問題 16.2. 次の行列 A の固有多項式 $f_A(x)$ および固有値を求めよ .

$$(1) \begin{pmatrix} 2 & 2 \\ 1 & 3 \end{pmatrix} \quad (2) \begin{pmatrix} 5 & -6 & -6 \\ -1 & 4 & 2 \\ 3 & -6 & -4 \end{pmatrix} \quad (3) \begin{pmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & 1 \\ 1 & 1 & 2 \end{pmatrix}$$

$$(4) \begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \end{pmatrix} \quad (5) \begin{pmatrix} 1 & 0 & -4 \\ 0 & 5 & 4 \\ -4 & 4 & 3 \end{pmatrix}$$

問題 16.3. A を n 次正方行列, P を n 次正則行列とすると, $f_{P^{-1}AP}(x) = f_A(x)$ であることを示せ .

問題 16.4. 上三角行列 $A = \begin{pmatrix} \lambda_1 & & * \\ & \lambda_2 & \\ & & \ddots \\ 0 & & & \lambda_n \end{pmatrix}$ に対して ,

$$f_A(x) = (x - \lambda_1)(x - \lambda_2) \cdots (x - \lambda_n)$$

であることを示せ .

問題 16.5. $A = \begin{pmatrix} A_{11} & A_{12} & \cdots & A_{1m} \\ O & A_{22} & \cdots & A_{2m} \\ \vdots & \ddots & \ddots & \vdots \\ O & \cdots & O & A_{mm} \end{pmatrix}$ ならば, $f_A(x) = f_{A_{11}}(x) \cdots f_{A_{mm}}(x)$

であることを示せ . ただし, A_{ii} は正方行列とする .

■ 第 9 回の解

問題 9.1 (1) 3 (2) 2 (3) 2 (4) 3 (5) 3

問題 9.2 (1) i) $a \neq 0$ のとき,

$$\begin{pmatrix} 0 & a & b \\ b & 0 & a \\ a & b & 0 \end{pmatrix} \xrightarrow{E_1(\frac{1}{a})E_3(\frac{1}{a})\times} \begin{pmatrix} 0 & 1 & \frac{b}{a} \\ b & 0 & a \\ 1 & \frac{b}{a} & 0 \end{pmatrix} \xrightarrow{P_{13}E_{23}(-b)\times} \begin{pmatrix} 1 & \frac{b}{a} & 0 \\ 0 & -\frac{b^2}{a} & a \\ 0 & 1 & \frac{b}{a} \end{pmatrix}$$

$$\xrightarrow{P_{23}E_{23}(\frac{b^2}{a})\times} \begin{pmatrix} 1 & \frac{b}{a} & 0 \\ 0 & 1 & \frac{b}{a} \\ 0 & 0 & a + \frac{b^3}{a^2} \end{pmatrix}.$$

したがって, $a + \frac{b^3}{a^2} \neq 0$, つまり $a + b \neq 0$ のとき階数は 3 で, $a + b = 0$ のとき階数は 2 である.

ii) $a = 0$ のとき,

$$\begin{pmatrix} 0 & a & b \\ b & 0 & a \\ a & b & 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 0 & b \\ b & 0 & 0 \\ 0 & b & 0 \end{pmatrix}$$

だから, $b \neq 0$ のとき階数は 3 で, $b = 0$ のとき階数は 0 である.

(2) $\{a, b, c, d\}$ の中の異なる数の個数で場合分けする. i) すべてが異なるとき, 階数は 4, ii) 異なる数が 3 つのとき (例えば $a = b, c \neq a, d \neq a, c \neq d$), 階数は 3, iii) 異なる数が 2 つのとき (例えば「 $a = b = c$ かつ $a \neq d$ 」, または「 $a = b$ かつ $c = d$ かつ $a \neq c$ 」), 階数は 2, iv) すべて等しいとき, 階数は 1 である.

問題 9.3 (1) $\begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ -2 \end{pmatrix}$, 自由度 0 (2) $\begin{pmatrix} -1 \\ -1 \\ 1 \end{pmatrix} + k \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$, 自由度 1

(3) $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} + k \begin{pmatrix} 3 \\ -1 \\ 2 \\ 0 \end{pmatrix} + l \begin{pmatrix} -5 \\ 1 \\ 0 \\ 2 \end{pmatrix}$, 自由度 2

(4) $\frac{1}{29} \begin{pmatrix} 19 \\ 20 \\ 0 \\ -22 \end{pmatrix} + k \begin{pmatrix} -1 \\ -1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$, 自由度 1 (5) $\frac{1}{2} \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \\ 0 \end{pmatrix} + k \begin{pmatrix} -1 \\ -1 \\ 2 \\ 1 \end{pmatrix}$, 自由度 1

問題 9.4 系 2.23 より, $\text{rank } AB \leq \text{rank } A$ かつ $\text{rank } AB \leq \text{rank } B$ が成り立つ. 一方, 仮定より AB は正則だから $\text{rank } AB = n$. したがって, $\text{rank } A = \text{rank } B = n$ であり, A, B は共に正則である.

問題 9.5 仮定より, $\text{rank } AB = 0$. したがって, 第 2 章の章末問題 5 より, $\text{rank } A + \text{rank } B \leq n$ が成り立つ.

(別解) $\text{rank } A = r$ とすると, $P'AQ' = \begin{pmatrix} E_r & O \\ O & O \end{pmatrix}$ を満たす正則行列 P', Q' が存在する. $C' = \begin{pmatrix} O & O \\ O & E_{n-r} \end{pmatrix}$ とおくと, $P'AQ' + C' = E_n$. ここで, $C = P'^{-1}C'Q'^{-1}$,

$P = P'^{-1}Q'^{-1}$ とおくと, $A + C = P$ と書ける (ただし, P は正則行列). 仮定から, $PB = (A + C)B = AB + CB = CB$. この式の両辺の階数を考えると

$$\text{rank } B = \text{rank } PB = \text{rank } CB \leq \text{rank } C = n - r, \quad (16.2)$$

したがって, $\text{rank } A + \text{rank } B \leq n$ を得る ((16.2) 式の最初の等号は系 2.21 を適用).

問題 9.6 仮定から, $AB = O$ を得るので, 問題 9.6 より, $\text{rank } A + \text{rank } B \leq n$. さらに仮定 $A + B = E_n$ と第 2 章の章末問題 4(1) より, $\text{rank } A + \text{rank } B \geq n$. したがって, $\text{rank } A + \text{rank } B = n$ を得る.

問題 9.7

$$\mathbf{u}_1 = a_1\mathbf{v}_1 + a_2\mathbf{v}_2 + a_3\mathbf{v}_3, \quad \mathbf{u}_2 = b_1\mathbf{v}_1 + b_2\mathbf{v}_2 + b_3\mathbf{v}_3, \quad \mathbf{u}_3 = c_1\mathbf{v}_1 + c_2\mathbf{v}_2 + c_3\mathbf{v}_3$$

とおく. このとき,

$\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \mathbf{u}_3$ が線形独立

$\iff x\mathbf{u}_1 + y\mathbf{u}_2 + z\mathbf{u}_3 = \mathbf{0}$ を満たす (x, y, z) は $(0, 0, 0)$ のみ

\iff 方程式
$$\begin{cases} a_1x + b_1y + c_1z = 0 \\ a_2x + b_2y + c_2z = 0 \\ a_3x + b_3y + c_3z = 0 \end{cases}$$
 は自明解しか持たない

$\iff A = \begin{pmatrix} a_1 & b_1 & c_1 \\ a_2 & b_2 & c_2 \\ a_3 & b_3 & c_3 \end{pmatrix}$ は正則

$\iff \text{rank } A = 3$

\iff 行列 A の線形独立な列ベクトルの最大個数は 3

$\iff a, b, c$ は線形独立

問題 9.8 (9.2) 式の解とは「平面ベクトル a, b の両方と直交するベクトル」と解釈することができる. 平面において 2 つのベクトルが線形従属であることと, それらが平行であることは同値であるから, a, b が線形従属であるときに限り, この 2 つに直交する 0 でないベクトルが存在する.

■ 第 2 章の章末問題 5 の別解

n 次正方行列 A, B に対し, 以下の不等式が成り立つ.

$$\text{rank } A + \text{rank } B - n \leq \text{rank } AB \quad (16.3)$$

(16.3) は

$$(n - \text{rank } A) + (n - \text{rank } B) \geq (n - \text{rank } AB) \quad (16.4)$$

と表すことができ, $(n - \text{rank } A)$ は方程式 $Ax = \mathbf{0}$ の解の自由度 (基本解の個数) に等しいことから

$$(Ax = \mathbf{0} \text{ の基本解の数}) + (Bx = \mathbf{0} \text{ の基本解の数}) \geq (ABx = \mathbf{0} \text{ の基本解の数}) \quad (16.5)$$

を示せばよい.

x_1, \dots, x_k を $Bx = 0$ の基本解とする. つまり,

- i) $Bx_i = 0$. ($i = 1, \dots, k$)
- ii) x_1, \dots, x_k は線形独立である.
- iii) $Bx = 0$ のすべての解は x_1, \dots, x_k の線形結合で表せる.

このとき, x_i ($i = 1, \dots, k$) は $ABx = 0$ も満たすので, x_1, \dots, x_k は $ABx = 0$ の基本解の一部と考えられる. そこで, x_1, \dots, x_k 以外の $ABx = 0$ の基本解を x_{k+1}, \dots, x_{k+l} とおく. このとき,

(1) $Bx_{k+1}, \dots, Bx_{k+l}$ は $Ax = 0$ の解

(2) $Bx_{k+1}, \dots, Bx_{k+l}$ は線形独立

である.

まず, (1) は明らかであろう. (2) を示すために,

$$c_1 Bx_{k+1} + \dots + c_l Bx_{k+l} = 0 \quad (16.6)$$

とおくと, これは

$$B(c_1 x_{k+1} + \dots + c_l x_{k+l}) = 0 \quad (16.7)$$

と書けるから, $c_1 x_{k+1} + \dots + c_l x_{k+l}$ は $Bx = 0$ の解である. したがって, このベクトルは x_1, \dots, x_k の線形結合で表すことができる;

$$c_1 x_{k+1} + \dots + c_l x_{k+l} = a_1 x_1 + \dots + a_k x_k. \quad (16.8)$$

しかし, $\{x_1, \dots, x_{k+l}\}$ は線形独立だから, $a_1 = \dots = a_k = 0$ かつ $c_1 = \dots = c_l = 0$ を得る. これで (2) が証明できた.

以上のことから, $Bx_{k+1}, \dots, Bx_{k+l}$ は $Ax = 0$ の基本解の一部となることがわかった. したがって, $(Ax = 0 \text{ の解の自由度}) \geq l$ となり, (16.3) が証明された.

■ 第 10 回の解と捕捉

復習問題 1 「逆行列が存在する \iff 階数が 3」を用いる.

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & -2 \\ -1 & k & 0 \\ 0 & -2 & 1 \end{pmatrix} \xrightarrow{E_{21}(1) \times} \begin{pmatrix} 1 & 2 & -2 \\ 0 & k+2 & -2 \\ 0 & -2 & 1 \end{pmatrix} \xrightarrow{P_{23} E_{23}(\frac{k+2}{2}) \times} \begin{pmatrix} 1 & 2 & -2 \\ 0 & -2 & 1 \\ 0 & 0 & \frac{k-2}{2} \end{pmatrix}$$

でるから, 階数が 3 になるための条件は $k \neq 2$ である.

(別解) 「逆行列が存在する \iff 行列式は 0 でない」を用いる. 3 行目について余因子展開すると

$$\begin{vmatrix} 1 & 2 & -2 \\ -1 & k & 0 \\ 0 & -2 & 1 \end{vmatrix} = -(-2) \begin{vmatrix} 1 & -2 \\ -1 & 0 \end{vmatrix} + \begin{vmatrix} 1 & 2 \\ -1 & k \end{vmatrix} = 2 \cdot (-2) + (k+2) = k-2.$$

したがって, 解は $k-2 \neq 0$ である.

復習問題 2 (10.12) のベクトルが線形従属とは

$$x(\mathbf{a} + 2\mathbf{b} - \mathbf{c}) + y(2\mathbf{a} + k\mathbf{b}) + z(3\mathbf{b} - 2\mathbf{c}) = 0 \quad (16.9)$$

を満たす $(0, 0, 0)$ でない実数の組 (x, y, z) が存在することである。(16.9) 式は

$$(x + 2y)\mathbf{a} + (2x + ky + 3z)\mathbf{b} + (-x - 2z)\mathbf{c} = 0$$

と表すことができ、ベクトル $\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c}$ が線形独立であることから、 x, y, z は

$$\begin{cases} x + 2y = 0 \\ 2x + ky + 3z = 0 \\ -x - 2z = 0 \end{cases} \quad (16.10)$$

を満たす。したがって、連立一次方程式 (16.10) が非自明解を持つための k の条件、つまり

り行列 $\begin{pmatrix} 1 & 2 & 0 \\ 2 & k & 3 \\ -1 & 0 & -2 \end{pmatrix}$ が正則でないときの条件を求めればよい.. この行列の行列式を求めると

$$\begin{vmatrix} 1 & 2 & 0 \\ 2 & k & 3 \\ -1 & 0 & -2 \end{vmatrix} = - \begin{vmatrix} 2 & 0 \\ k & 3 \end{vmatrix} - 2 \begin{vmatrix} 1 & 2 \\ 2 & k \end{vmatrix} = -6 - 2(k - 4) = -2(k - 1)$$

であるから、求める条件は $k = 1$ である。

問題. 任意のベクトル $\mathbf{a}, \mathbf{b}, \mathbf{c}$ に対し、3 つのベクトル

$$\mathbf{a} + 2\mathbf{b} - \mathbf{c}, \quad 2\mathbf{a} + \mathbf{b}, \quad 3\mathbf{b} - 2\mathbf{c}$$

は線形従属であることを証明せよ。

$$\begin{aligned} \text{問題 10.1 (1)} \quad x &= \frac{\begin{vmatrix} 1 & -1 \\ 4 & 3 \end{vmatrix}}{\begin{vmatrix} 2 & -1 \\ 1 & 3 \end{vmatrix}} = \frac{7}{7} = 1, \quad y = \frac{\begin{vmatrix} 2 & 1 \\ 1 & 4 \end{vmatrix}}{\begin{vmatrix} 2 & -1 \\ 1 & 3 \end{vmatrix}} = \frac{7}{7} = 1 \\ (1) \quad x &= \frac{\begin{vmatrix} 1 & -2 \\ -3 & -5 \end{vmatrix}}{\begin{vmatrix} 3 & -2 \\ 2 & -5 \end{vmatrix}} = \frac{-11}{-11} = 1, \quad y = \frac{\begin{vmatrix} 3 & 1 \\ 2 & -3 \end{vmatrix}}{\begin{vmatrix} 3 & -2 \\ 2 & -5 \end{vmatrix}} = \frac{-11}{-11} = 1 \end{aligned}$$

問題 10.2 (1) 直線 $y = 2x + 1$ 上の点を媒介変数 t を用いて $(t, 2t + 1)$ とおくと、この点は行列 A から定まる変換 φ_A により、

$$(t, 2t + 1) \mapsto (5t + 1, -10t - 2)$$

$$\left(\varphi_A \text{ は行列のかけ算作用 } \begin{pmatrix} 3 & 1 \\ -6 & -2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} t \\ 2t + 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 5t + 1 \\ -10t - 2 \end{pmatrix} \right)$$

に移る． $X = 5t + 1, Y = -10t - 2$ において， t を消去すると $Y = -2X$ であるから， $(5t + 1, -10t - 2)$ は直線 $y = -2x$ 上の点である．したがって， φ_A により直線 $y = 2x + 1$ は直線 $y = -2x$ に移る．

(2) (1) 同様に，直線 $y = -3x - 2$ 上の点を媒介変数 t を用いて $(t, -3t - 2)$ とおき， φ で移すと

$$(t, -3t - 2) \mapsto (-2, 4)$$

となる．上は任意の $t \in \mathbf{R}$ で成り立つから，直線 $y = -3x - 2$ 上の点は φ_A により，1 点 $(-2, 4)$ に移る (直線が点につぶれる)．

問題． 問題 10.2 の行列 A から定まる一次変換 φ_A に対し，傾きが -3 以外の直線はすべて $y = -2x$ に移り，傾きが -3 の直線はすべて 1 点につぶれることを証明せよ．

問題 10.3 第 2 回の問題 2.5 より，ベクトル a, b を 2 辺にもつ三角形の面積は

$$\frac{1}{2} \sqrt{\|a\|^2 \|b\|^2 - (a, b)^2}$$

に等しい．したがって， a, b を 2 辺に持つ平行四辺形の面積は

$$\begin{aligned} & \sqrt{\|a\|^2 \|b\|^2 - (a, b)^2} \\ &= \sqrt{(a_1^2 + a_2^2)(b_1^2 + b_2^2) - (a_1 b_1 + a_2 b_2)^2} \\ &= \sqrt{(a_1^2 b_1^2 + a_2^2 b_1^2 + a_1^2 b_2^2 + a_2^2 b_2^2) - (a_1^2 b_1^2 + 2a_1 a_2 b_1 b_2 + a_2^2 b_2^2)} \\ &= \sqrt{a_2^2 b_1^2 + a_1^2 b_2^2 - 2a_1 a_2 b_1 b_2} \\ &= \sqrt{(a_1 b_2 - a_2 b_1)^2} \\ &= |a_1 b_2 - a_2 b_1| = \begin{vmatrix} a_1 & b_1 \\ a_2 & b_2 \end{vmatrix}. \end{aligned}$$